

精神と物質

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9392

精神と物質

Mind and matter

金沢大学医学部麻酔・蘇生学教室
小林 勉

1967年、南アフリカのクリスチャン・バーナードが、頭部外傷を受けた24歳の女性の心臓を56歳の男性に移植した。世界で最初の心臓移植である。私は当時、アメリカのユタ大学で麻酔科医として勤務しており、当直医が待機するラウンジのテレビでこのニュースを知った。心臓移植について殆ど予備知識を持っていなかった私は、突然のニュースに非常に驚いたことを記憶している。その場に居合わせた十数人のアメリカの若い医師たちも同様であったが、議論をしているうちに、ヒトの生死と魂について、彼等と私の考え方が異なっていることに気が付いた。

彼等の意見は概ね心臓移植を賛美するものであり、拍動している心臓の摘出に批判的な意見は出てこなかった。脳が死ねば、やがては心臓も活動を停止するという意見が大勢を占め、何か割り切れぬものを感じた私の意見と対立した。今から思えば、私の考えには感情的なものが多分に含まれていた。しかし、相対したアメリカの医師たちの考えにも、科学的とは言いがたい要素が含まれていた。彼等が心臓の摘出を肯定した背景には、魂の復活を信ずるキリスト教の影響があると思われ、魂と肉体(物質)を別々のものとして考えている節が見受けられたのである。

最初の心臓移植が行われた三十数年前とは異なり、現在では、脳死が明確に定義され、臓器移植に関する法律も制定されている。しかし、全ての人が心臓移植に賛成している訳ではない。また、1999年初頭の現在に至っても、日本では、脳死者からの心臓摘出が行われていない。ヒトの魂が復活するか否か、さらには魂がどのようにして形成されるかは、まだ科学的に解明されていない。したがって、定義や法律がどうであれ、拍動している心臓の摘出を納得できない人がいても、彼等を責めることは出来ないだろう。

魂とは何か。ローマ・カトリックの教理問答書には、「理性と自由意志を持った肉体のない生命である」と記されている。この説明では、かえって混乱する人もいるだろう。ヒトの理性や自由意志は、主として哲学や心理学の分野で研究されている。しかし、哲学や心理学の知見を基に、心臓の摘出に反対する人達を納得させることは難しいと思われる。DNAモデルを提唱してノーベル賞を受賞したフランシス・クリックは、「The

Astonishing Hypothesis」(日本語訳: DNAに魂はあるか: 講談社)と題した著書の中で、哲学者や心理学者には魂の問題を語る資格がないと決めつけている。ましてや、宗教で納得させることが出来るとは思えない。好むと好まざるとに関わらず、もっと基本的なところから、魂を研究すべき時代になって来た。

魂は何処に存在するのか。前述のクリックは、個々の脳細胞やDNAには存在しないと考えている。彼は、経験の積み重ねによって形成された神経細胞の回路網が魂の本体であろうと推測しており、物理学や化学で魂を解明すべきであると主張している。相対性理論と量子力学を統合して新しい宇宙像を構築したスティーブン・ホーキングや、抗体の多様性を解明してノーベル賞を受賞した利根川進も、物理学や化学の面から、ヒトの精神(魂)と物質の関連性に強い関心を示している。

全く別ものと思われていた事象の統合により、学問体系や技術が大きく発展することは、科学史がしばしば証明している。17世紀にニュートンは、リンゴが落下する現象と惑星の運動を統合し、彼の名前が付いた力学を確立した。19世紀にはマックスウェルが、電気と磁気を統合し、電磁波の存在を明らかにした。また、今世紀には、DNAを介して生命現象と化学が統合された。これらの統合による数々の成果は、今さら記す迄もないだろう。21世紀における科学の命題の一つは、精神現象と物質の統合であると考えられる。私は、心臓移植の問題から、精神と物質を統合する研究の必要性を訴えた。しかし、この研究が成就した暁には、医学のみならず、科学全般や人々の思想にも大きな発展が見られるであろう。

ニュートンが彼の力学を確立するには、ケプラーの膨大な観測所見が必要であった。また、マックスウェルが電磁波を予言するには、ウェーバーとコールラウシュの実験結果が不可欠であった。天才と言えども、先人によるデータへの蓄積がなければ、その偉業は達成できなかったのである。金沢大学十全医学会雑誌は、学術的に高い水準を保っている。会員の中から、精神と物質を統合する天才が出現すれば、これに過ぎる快挙はない。しかし、先ずはデータへの蓄積が必要であろう。将来、この方面の研究でも、本誌が世界から注目されるようになることを期待したい。